

パネルの主旨とまとめ

松尾 剛次

「私のお墓の前で泣かないでください。そこに私はいません。眠ってなんかないません。千の風に、千の風になって、あの大きな空を吹きわたっています」というヒット曲「千の風になって」の歌詞とは異なって、我々の多くは石塔墓を立て、盆・暮れや周忌の度に、そこに詣でる。すなわち、墓を中心として死者供養は行われている。しかしながら、先の「千の風になって」が大ヒットし、その歌詞がほとんど問題とされないように、墓を中心とした死者供養の習俗も確実に変容を遂げつつある。火葬化が急速に進む韓国や経済発展が進む中国においても、死者供養のシステムは大きな変容を遂げつつある。我々のパネルでは、変容しつつある日本・中国・韓国における死者供養の諸問題をとり上げ、東アジア社会の独自性に光りを当てた。

代表者である私は、「人はなぜ石塔墓をたてるのか―阿弥陀信仰と弥勒信仰―」というテーマで、石塔墓を立てる背景にある宗教思想を考察した。日本古代においては、石造墓を作るのはまれであり、天皇の墓ですら九世紀には所在がはっきりしなくなっていた。石塔墓が天皇・貴族から武士クラスまで一般化するのには、鎌倉仏教が活躍する中世になってであった。とくに、二m―三・四mもの巨大な石塔墓で、かつ硬い安山岩、花崗岩を加工したものが造立される。現存するものだけでも、一三世紀末―一四世紀初頭のものが一〇〇を超える。しかも、そ

の下には金銅製の骨蔵器が見いだされる。そうした、巨大石塔造立の背景にある、死後、まず極楽に往生し、五六億七千万年後の弥勒下生に際して墓にもどるという阿弥陀信仰と弥勒信仰の混交した仏教思想に注目した。

佐藤弘夫氏は「幽霊の誕生―江戸時代における死者供養の変容―」というテーマで報告した。江戸時代になると幽霊に関する大量の情報が洪水のごとく出現する。中世の怨霊とは、質的・量的に明らかな断絶がみられる。なぜこういった現象が起こったのか。中国や朝鮮の事例を視野に収めながら墓制の変容と関連させつつこの問題を考えることによって、死者のイメージから、東アジアの近世・近代の独自性を展望してみた。

池上良正氏は、「無遮と無主―無縁供養の動態性―」というテーマで、「死者供養」を東アジアで形成され民衆層に普及した、ユニークで動態的な「救済システム」として捉える視点から、広義の「無縁供養」がこのシステムを広く民衆層に定着させる原動力になっていたことを指摘した。「無縁供養」には、特定の対象がなく平等という意味での「無遮」と、弔う縁者が不在の「無主」という二つの側面が、動態的かつ有機的に連動していたことに注目し、中国から日本に移入された施餓鬼の変容過程などをふまえて、その特性を宗教学の視点から考察した。

井上治代氏は、「変貌する韓国の死者供養に対する人々の意識と葛藤」というテーマで報告した。高度経済成長後の韓国では、都市化によって人口が都市に集住し、高層の集合住宅が普及したことによる葬儀の「場」の変化、すなわち「自宅」から「病院斎場」へと移行した。さらには大都市圏の墓地不足をも

たらし、火葬化政策が急激に推し進められた結果、一九九〇年代前半に二割だった火葬率が二〇〇九年には六割に上昇し、大都市圏では八割前後の火葬率となっている。儒教文化の伝統であるところの土葬から火葬へと変化し、特に二〇〇一年の葬事法の改正後は、死者供養のあり方が激変している。こういった韓国社会における人々の意識変化について、世代間や兄弟間の文化や宗教観の違い、そして葛藤等を中心に社会学的に分析した。具体的には、親の葬儀を経験した喪主世代（五〇代）男女に、父と母の葬儀のあり方とその感想、自分の場合はどうか等、子ども世代を視野に入れた意識について、面接調査を通して分析した。

多様化する現代日本の

「移民と宗教」の理解に向けて

代表者・司会 高橋典史

コメンテータ 中牧弘允

現代日本の滞日外国人の宗教状況と

その研究動向

高橋 典史

本報告は、日本における「移民と宗教」に関するこれまでの研究成果と今後の課題について検討することを目的とした。その前提として本パネルの発表者一同がこれまで共同調査を進めてきた、静岡県浜松市における滞日外国人（以下、「移民」と略す）をめぐる状況と彼ら／彼女らが集う宗教の現状について紹介した。浜松市内の移民が関わる宗教は大きく分けて、（一）カトリック教会（ブラジル人、ペルー人、フィリピン人、ベトナム人などが集う）、（二）南米系のプロテスタント教会（その多くはペンテコステ派であり、ブラジル人、ペルー人、フィリピン人などが集う）、（三）イスラームのモスク（インドネシア人などが集う）、（四）日系新宗教（ブラジル人、ペルー人などが集う）の四種がある。

それらの調査から明らかになって来たのは、移民たちが関わる宗教の多くが地域社会とは没交渉のエスニック・チャーチと